

# 世界をみつめて2

## ロンドン五輪と交通問題

荘中 孝之



ロンドンオリンピックもいよいよ間近に迫ってきた。7年にわたる計画は着々と進行し、今や7月27日の開会式を待つばかりだ。しかし770万人以上もの人々が暮らす、ヨーロッパ最大の都市で行われるこのビッグイベントで、懸案事項の一つとされているのが市内の交通問題である。ロンドンは世界に先駆け1863年に地下鉄を走らせた街であるが、残念ながらその公共交通機関についての評判は、今のところあまり芳しくない。市内の道路は慢性的に渋滞しており、その影響で乗車中のバスの行き先が変わることもしばしば。チューブと呼ばれる半円形の地下鉄車両は概して汚くて狭く、運行の遅れは日常茶飯事で、ラッシュ時には駅への入場が制限されることも珍しくない。また信号待ちのためか途中でしばらくの間停車することもたびたびで、慣れない私などが数年ぶりに乗ってそのような状況に置かれると、内心ではやや不安になってしまう。

そんな時に思いだされるのが、20世紀英文学史上に屹立する大詩人、T. S. エリオットの代表作『四つの重奏』（1943）の一節である。彼は現代人の精神的荒廃と宗教による救済の必要性を説いたが、その極致がこの作品であると言われている。「わたしは自分の魂に言った、静まれ、闇の寄せ来るにまかせよ。／この闇はやがて〈神〉の暗黒となるのだ。（中略）／地下鉄の列車が二つの駅のあいだで停まってしまって、／話し声が起こり、やがて沈黙の中に溶け、どの顔の背後にも／深まる精神の空白が見え、何も考えることがなくなって／恐怖のみが膨らむあのときのよう（中略）／わたしは自分の魂に言った、静まれ、望むことなく待て。」（岩崎宗治訳）停車中に周りの乗客を見ると、誰もが平然としている。エリオットによるこの一節を知ってか知らずか、とにかく何食わぬ顔をして、じっと辛抱強くやり過ごすのが英国流ということらしい。

ロンドン市民は今度の五輪にしても、相当

その覚悟を強いられそうだ。65億ポンド（約8300億円）もの大金が、市中心部と五輪公園を約7分で結ぶ高速鉄道の新設といった、交通網の改善に投入されたらしいが、それでも予測される事態の抜本的解決には程遠い状況だという。期間中は市内にオリンピック・ルート・ネットワーク（ORN）という関係者専用路が設置され、一般道路の車線が規制される。それが更なる交通渋滞を招くことは必至だ。ちなみに所要1時間の距離を通行する場合、少なくとも12分余分に時間がかかり、ORNの一部を通過する場合には、所要時間が20分長くなるという試算がある。8月初旬には朝のラッシュアワーが1時間半早い午前5時半に、午後の混雑は3時半に始まると予想されている。

そこで市は今年に入って、新サービスを始めた。公式サイトには各地下鉄駅の混雑予想と迂回ルートが示されている。試しに市中心部のポンドストリート駅を見ると、期間中の平日午後5～8時は30分以上の待ちということだ。あるニュースでインタビューを受けていた女性は、道路や地下鉄の混雑を避けるために、会期中は徒歩で通勤するつもりだと答えていた。市当局や各企業も在宅勤務を予定するなど、全市的な取り組みも進むが懸案の解消には至っていない。そこでボリス・ジョンソン市長は大まじめに、「五輪中は（ラッシュ緩和のため）パブに寄ってから帰りましょう」と説いたそうだ。最後は辛抱強い市民の協力を頼みとするあたり、いかにもイギリス的と言うべきか。私がおもこの時期にロンドンへ行って地下鉄にでも乗ろうものなら、アイリス・マードックの小説『魔に憑かれて』（1975）の主人公ヒラリーのように、降りるタイミングを逃して、環状線をぐるっと一回りしてしまいそうである。

しょうなか たかゆき（准教授・英文学・比較文学）